

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：17104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720023

研究課題名(和文)日本の禅浄言説における黄檗宗

研究課題名(英文)The Obaku School and Japanese Zen-Pure Land Discourse

研究代表者

James BASKIND (Baskind, James)

九州工業大学・大学院情報工学研究院・准教授

研究者番号：50455226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間内には、日本の宗教形態、主に黄檗宗を中心に禅仏教と浄土仏教との共通の言説、そして、戦国時代末・江戸初期のキリスト教と仏教の思想的交流史を取り上げ、それぞれの霊魂観、救済観、後生観の比較研究を行った。その結果としては、自力宗教の禅、他力宗教の浄土教、そして外来宗教のキリスト教のいずれにしても、一定の教理に基づいても、人間という媒体を通じてしか理解・実用できないものであるため、時代と場所によって大いに異なり、人間の多様性や解釈の余地を見せてくれることである。

研究成果の概要(英文)：During the research period I investigated the shared discourse of Zen Buddhism and Pure Land Buddhism in Japan with the Obaku school as the lens. In addition, I also investigated the interaction between Buddhism and Christianity during the late Warring States and Early Edo period. One of the results of my research is a renewed understanding of the way in which religious expressions, be it "self power" of Zen, the "other power" of Pure Land, or even Christianity, can be said to be based on a definite and clear doctrine/ideology, while the era/period and place in which they are practiced reveals a certain fluidity to them that highlights the variety of human nature and the breadth of possible interpretation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 宗教学

キーワード：宗教学全般 宗教史 宗教哲学 比較宗教学

1. 研究開始当初の背景

江戸初期の仏教思想形成史において、黄檗宗を中心に禅と浄土との共通の宗教形態における研究が十分に行われたとは言えず、あるいは、その最終的目的である禅の「悟り」と浄土教の「往生」が当時の日本人の靈魂観や後生観との関係・位置づけを取り上げる研究もさらに乏しい。黄檗における従来の一般的見解は、明末に形成した浄土的、墮落した融合的・折衷的禅仏教であったとされる。しかし、黄檗禅は日本の叡山道白が主導した曹洞宗の復古運動、そして、白隠慧鶴が起した臨済宗の復興運動の原動力でもあり、両宗の近代的形成や宗派意識において大変重要な影響を与えた。近年、近世・近代の仏教や文化における黄檗禅の中心的位置は益々認められつつある。欧米でもこれを認める傾向が見られ、その顕著な業績として、Helen Baroni の *Obaku Zen: The Emergence of the Third Sect of Zen in Tokugawa Japan*, (2000) *Iron Eyes: The Life and Teachings of Ōbaku Zen Master Tetsugen Dōkō*, (2006) や Michel Mohr の “Zen Buddhism during the Tokugawa Period: The Challenge to Go Beyond Sectarian Consciousness” *Japanese Journal of Religious Studies* 21/4 (1994)、そして James Baskind の “The Nenbutsu in Obaku Zen” *Japanese Religions* Vol. 33 nos. 1&2 pp. 19-34 (2008) である。このような海外での状況にもかかわらず、国内では黄檗禅を取り上げ、その教義、思想、形成の近代的意義や近世・近代仏教言説における位置づけについての綿密で詳細な研究が十分にあったと言えないのが現状であった。上記のことを踏まえ、江戸初期における、いわゆる「自力宗教」である禅と「他力宗教」である浄土を取り上げながら、より検討範囲を広くして、キリスト教も研究射程内に入れた上で、なにか豊かな実りもたらされることを期待し、開始したものである。

2. 研究の目的

本研究の目的と全体構想は(1)自力仏教と言われる禅と他力仏教と言われる浄土教の両者がどのように禅浄兼修概念の形成に結びついていったのかを明らかにすることと(2)黄檗宗のテキストに見られる禅浄言説を中心に、近世の日中の文化的・思想的交流の様相を明らかにすることである。そして、この自力、他力、禅と浄土による世界観を受け皿に、どのようにイエズス会とキリスト教の来日によって日本人の後生観・靈魂観が変様してきたかということをも明らかにすることによって、江戸初期から現代にかけての日本人の精神史の一面を把握する目的があったのである。

3. 研究の方法

本研究では、主に文献調査に基づき、禅・浄土教、そしてキリスト教も研究射程に入れ、近世初期以降の思想界の一面の新たな理解・総合を試みた。初年度は文献の収集と検討に当たり、平成23年から25年までは文献のより詳しい解読、そして他の研究者・学者との情報交換、必要に応じて、さらなる文献の調査、そして論文執筆を行う予定だったが、禅と浄、坐禅と念仏、そして超越的宗教と救済的宗教の現代的表象や言説を把握し、日本における念仏言説を解明するという一つの大きな研究目的を満たすために、他の宗派まで検討領域を広げる必要が出てきた。そのため、22年度から近世以降の日本仏教における禅思想と浄土教思想の役割と位置づけを明らかにし、23年度からは万福寺だけではなく、他の寺院にある文献の閲覧、収集、そして研究者との情報交換してきた。24年度からは、主に『妙貞問答』以降の日本思想・宗教言説の形成・発展過程を精査してきた。徳川のいわゆる「合理精神」のルーツをたどり、キリスト教との関係性を検討する中、17世紀前半・後半の儒学、特に第一原理をめぐる理論(朱子学的客観的唯心論と陽明学的主観的唯心論など)を取り上げ、どのようにキリスト教の絶対一神教言説に影響されたのか、どのような思想上の関連づけがあり得るかということを検討した。明治に入り、信仰の自由となり、改めてキリスト教が来日し、妨げなく、布教活動に当たっていく。その当時、キリスト教の神概念、後生観にもっとも近い浄土教系の僧侶と改めて論争がはじまり、展開していく。浄土宗の養麟徹定、浄土真宗の井上円了、村上専精のような人物がキリスト教を論破・批判することによって、どのように近代的宗教言説を模索したことと、キリスト教がどのような役割を果たしてきたのかという2点について明らかにすることが研究計画の終結課題となった。

4. 研究成果

本研究の主たる成果は、下記「主な発表論文など」の通りである。以下の通り各論の概略を述べることにする。

a. 妙貞問答の禅宗批判—その空と無について—『妙貞問答』を読む—ハビアンの仏教批判』法蔵館 二〇一四年 “Habian no Zenshū hihan: sono kū to mu ni tsuite,” *Myōtei mondō no kenkyū*, Hōzōkan, 2014.

これは、下記の(d)の省略した日本語版である。

b. 資料紹介: 「念仏」独湛の『翻刻当麻図記』—その背景と内容— “Shiryō shōkai: Nenbutsu Dokutan no Honkoku Taima zuki-sono haikai to naiyō (“Nenbutsu Dokutan’s Honkoku Taima zuki) 『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要(人間科学)』 *Kyūshū kōgyō daigaku daigakuin jōhōkōgaku*

kenkyūin kiyō (ningenkagakukei) No. 27 March 2014, pp. 79-110.

明末の僧であった独湛にとっては、日本浄土宗（浄土教）はどのように見え、どのような点に共感したのかなど、日中浄土教の相違点を考え、中国の浄土教的理解から日本の浄土宗の信仰に傾いて行った理由について検討した。そして、独湛が執筆した当麻曼荼羅縁起説をめぐる書物を中心に、日本文化史・日中交流史における浄土言説、当麻曼荼羅、そして中将姫伝説の位置づけも考察してきた。

c. “Christian-Buddhist Polemics in Late Medieval/Early Modern Japan” *Religion Compass* vol. 8 no. 37 pp. 37-48.

この論は、戦国時代末期・江戸初期の仏教とキリスト教の交流史を概観する論文である。戦国時代末期の政治情勢・宗教形態を背景に、その両方が仏教とキリスト教の第一接触の時からどのように反応しあい、相互に受容し、そして発展してきたことを取り上げながら、その交流史における仏・耶の位置づけを新たに把握することを試みた。

d. “The Matter of the Zen School”: Fukansai Habian’s *Myōtei Mondō* and His Christian Polemic on Buddhism” *Japanese Journal of Religious Studies* vol. 39 no. 2 pp. 307-331. (査読有り)

キリスト教に改宗した、元禅僧である不干斎巴鼻庵（フカンサイ・ハビアン）の『妙貞問答』は、仏教各宗に対する最初の体系的な批判論である。ハビアンの批判の中心は仏教が空・無に基づくことと、後生の助けにならないということである。ハビアンの議論のポイントは、仏教における「空」の多義性を認めず、否定的な意味合いを込めて一面的な「虚無」とすることにある。キリスト教の救済論の基本は、人の魂が存在論的な有（神）にもとづいていることにあり、ハビアンは、神にもとづくキリスト教の有の視点から、仏教の無を論破する。本論ではハビアンの仏教批判を考察し、キリスト教への改宗以前に学んだ禅僧として受けた教育と論争方法によって禅宗を批判していることを論じる。政治的にも思想的にも激動していた十七世紀初頭の社会で、禅がいかに批判的に受け止められていたかということも明らかにする。

e. “Establishing the Identity of an Immortal: The Peach Bud Collection and Old Master Chen” 『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）』 *Kyūshū kōgyō daigaku daigakuin jōhōkōgaku kenkyūin kiyō (ningenkagakukei)* No. 25 March 2012, pp. 37-63.

これは、上記の論文を踏まえ、『桃蕊編』と陳博との関係をさらに検討し、その真相に迫っていった

f. “Ming Religion in Edo Japan: A Look at Some of the Obaku School’s Daoist Elements” 『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）』 *Kyūshū kōgyō daigaku daigakuin jōhōkōgaku kenkyūin kiyō (ningenkagakukei)* No. 24 March 2011, pp. 107-121.

この論は、黄檗宗における道教的な要素を取り上げながら、当時の日本禅宗現状・形態と比較研究を行った。

g. “A Daoist Immortal among Zen Monks: Chen Tuan, Yinyuan Longqi, Emperor Reigen and the Obaku Text, *Tōzuihen*” *The Eastern Buddhist* vol. 42 no. 2, pp. 101-130. (査読有り) 本論では、黄檗宗は、霊元天皇と黄檗宗の霊的な関係を示す『桃蕊編』(とうずいへん) というテキストを作成することによって、17世紀以後に黄檗宗が置かれた不安定な状況を生き抜こうとすることをと論証する。霊元天皇から宋の仙人陳搏 (?-989) に関する事跡が求められた事に書物の動機を見出し、展開させていく。陳搏は、黄檗宗の開祖の隠元隆琦の日本渡来に当たって、隠元故郷の福清石竹山に扶乩の仙人陳博と名乗って現れ、渡来後の布教の見込みや霊元天皇の誕生、即位などを予言したという。この書物の綿密な検討により、隠元の後、黄檗僧が、隠元の語録に陳博という名前が出てくる事実を粉飾し、陳搏と陳博とが同一人物であると主張したことを明らかにする

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

1、ジェームズ・バスキンド 妙貞問答の禅宗批判—その空と無について 『妙貞問答』を読む—ハビアンの仏教批判』法蔵館二〇一四年 “Habian no Zenshū hihan: sono kū to mu ni tsuite,” *Myōtei mondō no kenkyū*, Hōzōkan, 2014.

2、ジェームズ・バスキンド 資料紹介：「念仏」独湛の『翻刻当麻図記』—その背景と内容— “Shiryō shōkai: Nenbutsu Dokutan no *Honkoku Taima zuki*-sono haikai to naiyō (“Nenbutsu Dokutan’s *Honkoku Taima zuki*)” 『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）』 *Kyūshū kōgyō daigaku daigakuin jōhōkōgaku kenkyūin kiyō (ningenkagakukei)* No. 27 March 2014, pp. 79-110.

3、ジェームズ・バスキンド “Christian-Buddhist Polemics in Late Medieval/Early Modern Japan” *Religion Compass* vol. 8 no. 37 (February 2014) pp. 37-48.

4、ジェームズ・バスキンド “Establishing the Identity of an Immortal: *The Peach Bud Collection* and Old Master Chen”『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）』*Kyūshū kōgyō daigaku daigakuin jōhōkōgaku kenkyūin kiyō (ningenkagakukei)* No. 25 March 2012, pp. 37-63.

5、ジェームズ・バスキンド “The Matter of the Zen School”: Fukansai Habian’s *Myōtei Mondō* and His Christian Polemic on Buddhism” *Japanese Journal of Religious Studies* vol. 39 no. 2 (fall 2012) pp. 307-331. (査読有り)

6、ジェームズ・バスキンド Ming Religion in Edo Japan: A Look at Some of the Obaku School’s Daoist Elements” 『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）』*Kyūshū kōgyō daigaku daigakuin jōhōkōgaku kenkyūin kiyō (ningenkagakukei)* No. 24 March 2011, pp 107-121.

7、ジェームズ・バスキンド “A Daoist Immortal among Zen Monks: Chen Tuan, Yinyuan Longqi, Emperor Reigen and the Obaku Text, *Tōzuihen*” *The Eastern Buddhist* vol. 42 no. 2, pp. 101-130. (査読有り)

〔学会発表〕(計1件)

1、ジェームズ・バスキンド 禅宗之事」と「浄土宗之事」- その問題と位置づけ (“The Matter of the Zen School” and “The Matter of the Pure Land School”: Problems and Issues) delivered at symposium, 『妙貞問答』の研究・訳注・英訳 (*Myōtei Mondō: Research and Translation*) International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, April 7, 2012.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

本研究についての問い合わせ先：
baskind@hum.nagoya-cu.ac.jp

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ジェームズ・バスキンド (James Baskind)
九州工業大学 大学院情報工学研究院
研究者番号：50455226